

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 井関 大介

本論文は、「宗教」概念が導入される前の江戸時代において、宗教的なものがいかに語られたかを、経世論的宗教論という概念を用いて論じたものである。一般に宗教は私的な信仰（ビリーフ）の問題とされる。江戸時代においても宗教的なものを心における修養の問題とする語り口がなかったわけではないが、信を度外視して宗教的なものの社会的機能を論じる議論が存在した。主に儒者たちによるこの議論を井関氏は経世論的宗教論と名づけ、その展開を跡づける。論文は序章、第一～九章、結論、それに参考文献・資料からなる。

序章で本論文の基本的な視点を示したあと、第一章と第二章は熊沢蕃山を扱う。蕃山は天地の自然に「道」「理」が備わっていると考える朱子学者であったが、同時に「大道」を実現する機能を果たすなら儒教の形式にこだわる必要はなく、故に仏教の葬祭も容認されたとした。これは教化のための「仮構」として神や仏を利用するという方法であるが、それは儒教の教説をも相対化する道を開くことになる。

第三章では十八世紀の神道家である増穂残口を、第四章では増穂に対する批判の書を扱う。増穂は蕃山が示したような相対論的な合理主義に反発し、重要なのは何が真であるか見極めることではなく、信じられる何かを持つことであるとした。増穂を批判する者は、真理に対しては判断を留保しつつ、意図的に信じられるものを構築しようとする方法こそが、相対主義に他ならないと指摘する。

第四章では荻生徂徠の鬼神論と礼楽論が俎上に挙げられる。蕃山の問題意識を継承し、徂徠は鬼神は社会の統合のために聖人が仮構したものであるとし、礼楽により人心を教化する必要性を説く。宗教的なものを社会的機能のために利用するという点で、徂徠は蕃山と共通することになる。

第六～八章は、本居宣長との対比において上田秋成を取り上げる。物理的世界を理性によって把握することを放棄し、全ての不条理を「神のしわざ」として受容する宣長に対し、秋成はそれが客観性を欠くものとして批判し、ひたすら実証的に世界を語ることで、宗教的なものを浮かび上がらせようとする。しかし、それは怪異を否定する議論に対する懐疑を積み重ねる不可知論にしかならない。そこで彼が選んだのは、宗教的なものを直接語るのではなく、それを語る人々を語ることで、宗教的なものを宙づりにし、合理主義から守るという方法であった。秋成の語りは、宗教の共同体的な機能を問題にする経世論から切り離されたところにあるのであり、井関氏はこれを都市知識人的な態度とする。

本論文は蕃山、増穂、徂徠、宣長、秋成などの多くの思想家の言説を丹念に分析し、江戸時代を通じた宗教論の展開を構築する斬新な内容になっている。もとより諸思想をどのように配置するか、本論文で扱わなかった諸思想とどうつなげるかなど、残る課題は多いが、その視点の独創性の価値は高く評価できる。よって審査委員会は博士（文学）を授与するのに値するものと判定した。